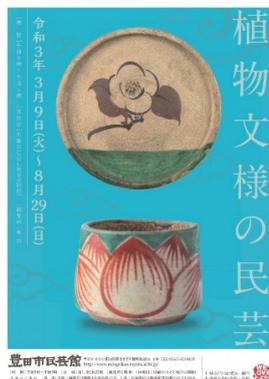


◎ 美術館情報

新型コロナウイルス感染拡大防止のため、多くの美術館等で、臨時休館やイベントの休止、展覧会の中止や開催期間の変更、および入館方法等が変更になっています。

状況が日々変動しているため、各施設の公式ホームページなどで最新の情報をご確認ください。

1. 豊田市民芸館【愛知・豊田】(<https://www.mingeikan.toyota.aichi.jp/exhibitions/>)



3月9日(火)～8月29日(日)

第102回企画展：植物文様の民芸

石皿に描かれた今にもこぼれそうな大輪の菊、台所用品である播鉢には雲のように淡く広がる桜と鮮やかな紅葉、小ぶりの香炉には側面いっぱい蓮の花、普段使いの日用品である民芸品にはしばしばこのような美しい植物文様が描かれます。本展では江戸時代中期の図説百科事典であり、項目数の多さでも知られる『和漢三才図会』の挿絵とともに植物の描かれた民芸品を約250点展示紹介します。

2. とうしん美濃陶芸美術館【岐阜・多治見】(<https://www.shinkin.co.jp/tono/toshin/pdf/minotougei.pdf>)

4月1日(木)～6月13日(日)

企画展：土からはじまるーセラミックバレー・奇跡の土プロジェクトー

はるか昔から陶土に恵まれてきた美濃は、この陶土によって、やきもの産業と文化が発展してきました。本展は、土にこだわり制作している作家を紹介します。



3. 国立工芸館【石川・金沢】(<https://www.momat.go.jp/cg/exhibition/>)

4月29日(木・祝)～7月4日(日)

国立工芸館石川移転開館記念展Ⅲ：



近代工芸と茶の湯のうつわー四季のしつらいー

日本では茶の湯の発展とともに、さまざまな素材を用いた“茶の湯のうつわ”がつくられてきました。それらは、つねに時代を映す鏡のように、新たな考えや造形を見せています。本展では、個としての想いを造形や意匠に表している工芸家の「作品＝茶の湯のうつわ＝表現のうつわ」と、使い手からの「見立てのうつわ」を、四季の取り合わせの中で紹介し、時代によって移りゆく、茶の湯に対する作家の思考や茶の湯の造形について探ります。

4. 根津美術館【東京・港区】(<http://www.nezu-muse.or.jp/jp/exhibition/next.html>)

4月17日(土)～5月16日(日)

開館80周年記念特別展：国宝燕子花図屏風 色彩の誘惑

尾形光琳(1657～1716)の「燕子花図屏風」は、カキツバタの群生を、金箔を貼った大画面に群青[ぐんじょう]と緑青[ろくしょう]の二種の絵具のみを使って描いた作品です。本展では、紺紙金泥経や、青や緑を主調とする画面に金彩が加わった中世の仏教絵画、あるいは唐時代以来の金碧[きんぺき]山水などと、この三色が活躍する清新な古九谷や黄瀬戸など同時代の陶芸作品、さらに、色彩傾向を同じくする金屏風の数々をあわせて展示することで、「燕子花図屏風」に新しい光を当てることを試みます。

